カトリック　三軒茶屋教会

おとずれ

2015年4月5日発行　第60巻　第3号

復活号

家 庭 集 会

主任司祭ミカエル湯 澤 民 夫 神父

十数年前、三軒茶屋教会に転任してきた頃、ブロック制が布かれていたにも拘わらず、集まりがほとんどないことに、不思議さを覚えた記憶がある。　田園調布は、比較にならないが、21 の家庭集会がわかれていた。私が転任ころには、三人の司祭がそれぞれ七つの家庭集会を担当していた。大体、毎週二か所の集会があって、それぞれの集会でことなるが、聖書や公文書の勉強や分かち合いをしていた。そして、葬儀に関しては、通夜や葬儀のお手伝いをしていた。司祭の方も、ほぼ分担しているという感じであった。互いに、補い合うこともなく、その地域のことは担当の司祭に一任、そんな感じであった。もちろん最終的には、主任司祭が責任を取り、全体を把握はしていたが。

ところが三軒茶屋に来てみると、地域の集まりはなく、あっても、信徒だけが集まっているという。それなら、それでもいいやと思っていた。全部を回ることになったら、それこそ大変だからである。その頃どうであったのだろうか。教会の様々な仕事、掃除、行事の世話など、今日のような役割分担主体のブロックであったのであろうか。それとも、家庭集会的なつながりを主とした集まりであったのであろうか。

司祭になってすぐに、桐生の教会で働くことになった。地区制度があったようであるが、全てが機能していたわけではなさそうであう。ある地域は、ほとんど集まりがなく、ある地域は、夕食を兼ねて親子で家庭に集まっていた。そこでは、大人が勉強や話し合いをしていると、子供たちは、子供たちで遊んでいて、食事になると、一緒になって、他人の子供も家の子と同じといった和気あいあいとしたものとなった。もっとも、その中核になった人たちは、そのころ盛んであった「マリッジ・エンカウンター」に参加した人たちで、分かち合いになれていたし、人の繋がりもあったからであろう。

いま、教会委員長が、ブロック制の見直しの提案をしている。「茶話会の手伝いが足りるかどうか、といった話だけではなく、教会に来ている方々にとって、結びつきを感じられるような仕掛けを、ちゃんと作っておく必要があるのではないか」と、提案の背景となる根拠を述べている。

難しい話かもしれないが、現代の日本の社会全体で考えなければならない課題につながるのではないかと思っている。人との関わりの必要性は、東日本大震災の復興の過程の中で、「絆」というキーワードでも表されたように、人と人との繋がりの必要性が唱えられた。他方、人と人との繋がりを作ることの大変さを知って、しり込みしている人たちも多い。結婚しないという現象もその一つの現れであろう。ブロック制の見直しは大変であろうが、高齢化を考えると、今必要なことなのかもしれない。

教皇フランシスコは特別聖年を宣言

3 月 13 日選出から 2 年目を迎えた教皇フランシスコは、バチカンの聖ペトロ大聖堂で行われた四旬節の回心式において、特別聖年「いつくしみの聖年」の開催を宣言されました。教皇はこの聖年を、いつくしみを証しするカトリック教会の使命を強調するための年とし「誰も神のいつくしみから排除されないのです」と呼びかけました。
この特別聖年は 2015 年 12 月 8 日に始まり、2016 年 11 月 20 日まで続きます

三軒茶屋教会黙想会「回心とは？」の要約　2015・3・1

聖アントニオ修道院　靜　一志 神父

「回心」とは「改心」でもなく「悔い改め」でもない。「心を百八十度回す事。」端的に言えば自己中心の心と生き方を、神様中心に切り替える事。過去を悔いる事でもなく改める事でもない。私達は皆意識しないで自分中心に生きている。この世は自分勝手と自分勝手がぶつかり合って何とか成り立っている。地球上の全ての人類が皆自分中心に生きているからこそ、数々の不調和が生まれる。相手の事等何も考えないからこそ、盗みも殺人も戦争もテロも起こる。でもこの世はそれでも辛うじて成り立っている。愛の神様を信じなくてもこの世は成り立つ。エゴとエゴがぶつかり合っても、何処かで折り合いを付けざるを得ないから。皆が自分の利益を求めて競争する資本主義社会でも、時には自分が潰され、時には相手を潰しながらも何処かで決着を付けている。否応なしに付けざるを得ない。そんな不毛のこの世に驚異的な祈りを教えたのはイエス様。それが「主の祈り」で、私達人間が絶対に発想出来ない思考。正に神様の側からの祈り。私達人間の祈りは全て私達人間の側からの祈り。私達にはそれしか発想出来ない。それが人間の限界。でもこの呪縛を破る祈りが主の祈りの前半。先ずは「お父さん、私達の、天の中の」と言う呼び掛け。何の前提もなしに「お父さん」と呼び掛ける。ユダヤ教から見たら実に失礼な言葉。でも人間が造る差別が全て撤廃される。人類が「お父さん」と呼ぶ事は、全員が「父の子」だと言う意味。だから「私達の」と受ける。この「私達の」は人間だけを表すのではなく、全被造物を指す。私がこの祈りを祈る時、全被造物を代表して立つ事になる。つまり天と地を結ぶパイプのように壮大な役割を受けて立つ。足は地に縛られていても、心は天の父に上げられる。実に気宇壮大な呼び掛け。次は「あなた祈願」と言われる「御名が」「御国が」「御旨が」と神様が主語の三つの祈り。「を」と言えば私達が主語で「御名」も「み国」も「み旨」も対格になる。でも主の祈りの前半は神様を絶対に対象扱いしない。私達は「主よ、主よ」と言いながら自分が主で、神様を従にし易い。神様こそが「まことの主。」だからこそ「主」だけを「主」扱いする事が私達人間の信仰の出発点。だから私達はここで完全に自己中心を封じられる。神様中心にならなければこの祈りは空文になる。私達は無理矢理神様の立場に立たせられる。でもそれに気が付かなければ

相変わらず自分中心の意識の中から出られない。意味も考えずにただ口先で唱えているだけ。「み名」とは御父ご自身の事。天の御父「が」世界中の人々や創造された全ての被造物から大切にされますように、
と切に願う。子として最高の願い。自分の事ではなく天の父が崇められる事こそ、子の最大の喜びだとすれば、これ以上素晴らしい「父中心」の祈りはあり得ない。イエス様は私達人間に自分の強固なエゴを捨てて、父である神の為に祈る、祈りの最高峰を教えた。勿論御父が私達の拙い祈りを必要としているのではない。私達が祈らなくても父の御名は本来的に聖である。私達が「み名が聖とされますように」と祈ったからと言って、神様に何一つ付け加える事は出来ない。この祈りを必要としているのは、天の御父ではなく私達自身。この祈りを上の空ではなく心から祈れたら、私達自身が真の幸せを獲得出来る。狭い自分を抜け出して広大な神様広場に導かれるから。自分に縛られている限り私達はエゴの奴隷。この祈りを祈る一瞬でも、まことの自由を感じる事が出来る。原文は「み名が聖とされますように」と祈らされる。「聖」とはヘブル語では「分離」を示す。「俗」なるものと完全に隔離された状態が「聖。」「聖なるかな。聖なるかな。聖なるかな」とは「離れている。離れている。離れている」と言う意味。私達不完全な人間が完全な神様を畏れかしこむ気持ちと心情を表明したもので、実際は御父が私達の中におられ、逆に言えば私達全被造物が天の御父の中でだけ存在出来ている。天の父から離れる事等完全に不可能。私達が「聖なるかな。聖なるかな。聖なるかな」と最も聖である神様から離れるように歌う度に、実は私達自身が益々神様に引き寄せられる。「離れて下さい。離れて下さい。離れて下さい」と祈る毎に、私達に近くなって下さる。所詮私達全被造物は神様から離れる事等絶対に出来ないのが物理的な事実。でも私達人間の心根として、聖である神様に全く相応しくない自分の存在を知れば知る程、神様から遥かに遠い自分を感じる。夜中に漁をして魚が捕れなかった朝シモン・ペトロがイエス様と出会い、網を下ろしなさいと言われた時、「先生、私達は夜通し働きましたが何も捕れませんでした。でもお言葉ですから網を下ろして見ます」と言う。漁の専門家が素人の言う事を受け入れる事は本当に驚き。その結果大漁になった時にシモンは驚異の言葉を発する。「主よ、私から離れて下さい。私は罪深い者です」と。「先生」が一瞬で「主」に変わっている。勿論本心からイエス様に離れて欲しいのではない。イエス様の聖性に打たれて思わず口にした言葉。だか

らこそシモンの飾れない本心が如実に現れている。だからこの時こそシモン・ペトロはイエス様の最も近くに居た事が分かる。シモンの良い所はこれが続かない事。良い時と悪い時が大きくぶれるのがシモンの特徴。でも近付いたり離れたりを繰り返しながら、確実にイエス様に近付いて行く姿が美しく羨ましい。因みに聖母マリアは「主の御名は聖」と言い切るルカ１・49。「み名」の次に「み国が来ますように」と祈らされる。「み名」の祈りは私達人間のエゴを完全に排除する。私達が入る余地は全くない。ここで私達は完全に自分勝手なエゴを捨てさせられる。純粋に神である父の存在に関わる事を祈らざるを得ない。私達が自分のエゴに死んで、神様の事を百㌫優先する事が求められ、それなしにこの部分の祈りは空しい。正に私達の勝手な望みから完全に隔絶した祈り。でも「み国」の祈りは来ますように」と、神様から出てこちらに向かって来る方向性を示す。でも新たに父の国が近付くのではない。私達は既に父の国の中で生まれ、その中で生きて死ぬ。父の御国から出る事は誰にも出来ない。ではなぜ「み国が来ますように」と祈るのか。それは私達の心が余りにも父の愛の国から遠いから。私達自身の心と体に御父の愛の支配が近付きますようにと祈る事は絶対に必要。神様の為には不要でも私達の為に必然。そして「み旨」の祈りは諸に私達の日常生活に関わって来る。神様のみ旨が絶対に受け入れられない時がある。私にとって都合の良いみ旨は喜んで受け入れるが、絶対に受け入れたくない本当に嫌なみ旨も必ずある。でも「私の好きなみ旨だけがなりますように」ではなく、「あなたのみ旨がなりますように」と祈る事には真の勇気が要る。自分にとってどんなに辛くて苦しいみ旨でもなりますように、と祈らされている。例え思い掛けない非情で残酷に見えるみ旨を与えられても、一度でもこの祈りを祈ったら、何も文句が言えない事になる。「あなたは私のみ旨を祈ったのではないか」と言われれば、何も反論が出来ない。私達は「この辛い試練に耐える力を恵んで下さい」と祈る以外に方法はない。勿論私達は孤独で試練を乗り越える事は出来ない。でも残酷な十字架の苦しみと凄惨な死を、私達全被造物の救いの為に唯一人で背負われて耐えられたイエス様が共に担って下さるからこそ、私達も自分に与えられた苦しみと死を通して、全被造物を救う神の子の業に参加出来る資格を与えられた。イエス様の大きな苦難と十字架の死に合わせて、私達の拙い苦難と死を御父に捧げたい。

パウロの回心(ピエトロ・ダ・コルトーナ画)

シェラレオネの現状

３月１５日１０：３０のミサ後、シェラレオネから一時帰国中の御聖体の宣教クララ会のシスター白幡和子様より、シェラレオネの現状についてお話をしていただきました。
シスターは主にシェラレオネで 40 年間子供の教育に携わっておられます。
以下、お話の内容を紹介いたします。

皆様、こんにちは。
私は、東京にある日本地区本部、御聖体の宣教クララ修道会の一員として、1994 年から西アフリカのシェラレオネで主に教育活動を通して奉仕しています。
1941 年に私たちと同じ会のメキシコ人の 4 人のシスターたちが行った時には、女子教育などは全く考えられておらず、シスターたちが一軒一軒訪ね、女子の教育の大切さを説き、親たちを説き伏せて 30 名ぐらいのグループで小学校が始まりました。今は幼稚園、小学校、中学校、高等学校、職業センターを合わせると 2,500 名になります。
北海道ぐらいの大きさのシェラレオネは、1 年が雨季と乾期に分かれています。一番暑いのは 3 月から 4 月です。雨季の最中には雨が降り続き、乾期にはサハラ砂漠から飛んでくる砂塵で 12 月の末には雪ではなく、砂のホワイトクリスマスになります。
主な産物はダイヤモンド、金、ボーキサイト、コーヒー、ココアなどですが、ほとんどはレバノン人やほんの一部の人に握られていて貧しい人があふれています。
マンゴ、パパイア、パイナップル、バナナは豊富にあります。子供たちが甘いマンゴを食べるとお腹が一杯になり、食事が少なくてすむので、貧しいお母さんは助かります。
ほとんどの家庭は一日一食です。2 年前に亡くなったシスター根岸は中学校で教えていたとき、お休み時間に修道院にお水を飲みに行く途中で、うずくまっているやせた女の子を見ました。「みんな喜んで遊んでいるのに、なぜあなたは遊ばないの？」と聞きましたら、「おなかがすいて、力がでないの」という答えが返ってきました。
シスターは、次に帰国した時に、給食運動のための援助を訴えて日本中をまわりました。その当時、一杯のコーヒーをあなたが我慢してくださると、一人の子供が一ヶ月食べることができました。数え切れない善意の方々のおかげで、小学校の給食が始まると、生徒の数もぐっと増えました。それまでは 12 時を過ぎると、暑さと空腹で生徒も教師も眠ってしまいました。
私は初め 3 年生を受け持ちましたが、1961 年までイギリスの植民地だったので公用語は英語で、学校でも基本的には、英語で教えなければなりませんでした。
英語の reading の教科書はたったの 8 冊で、1 冊の本を 5 人が囲んで、ある子供は逆さから、ある子供は斜めから、他の子供は横から読んでいるのです。これは reading ではなく、memorizing です。それで私はひとりずつにカーボン紙で

タイプをしてコピーを作りました。
低いトタン屋根の教室はとても暑く、お昼過ぎにはベンチを外に持ち出してマンゴの木の下で教えたものです。また雨が降ると気温が少し下がり、私たちには心地良いのですが、栄養不足でカロリーの少ない子供たちにとっては寒いので、「シスター、窓を閉めて下さい」と頼まれるのです。ガラスではなく、木の窓を閉めると暗くなってしまい、黒板に書いた字が読めませんから、急遽、宗教か、音楽、あるいは物語に科目を変えて授業を続けました。
アフリカの人たちはとても耳が良く、はやく歌を覚えます。遠くから太鼓の音が聞こえてくると、すぐに立ち上がって踊り出します。クリスマスや新年には、必ず、「神様、死ななかったよ。どうもありがとう。」と大人も子供も歌って踊って体全体で喜びを表現します。
私は 2004 年から幼稚園で働いています。雨が降ると太陽が出ないため暗く、時計もないので時刻がわからず、ほとんどの子が遅刻してきます。傘を持っている子は少ないです。晴れている日は、「シスター、おはよう」と遠くからかけてきて喜びいっぱいのハグをします。全人口の 80%はイスラム教で、一夫多妻ですから、子供の数はとても多いです。
一応小学校教育は自由となっていますが、文房具や制服を買えない子供たちは学校に来ることができません。長い間、アフリカに住んで、彼らから教えられたことはたくさんありますが、いちばん身にしみるのは、貧しくても分け与えることです。これはとても美しいことです。
例えば、日本の家族から送ってもらったあめを一人の子供にあげると、それを歯でくだいて周りのこどもたちに分け与えるのです。
年に一回、東京の玉川学園の先生方が送ってくださるお金で子供たちの給食は、いつものお魚の代わりに牛を２頭買ってお肉を入れます。ほんの小さな一切れですが、それを最後まで残しておいて、「シスター、見て、見て。これ、今日はお肉を食べるんだよ。」と園長室まで見せにとんで来ます。その嬉しそうな顔は特別です。
昨年来のエボラ出血熱による感染は、それはひどいものでした。7 月から現在に至るまですべての学校は閉鎖されたままです。
エボラ出血熱は、はじめはマラリアと似ており、消毒するという知識もなかったので感染が広まってしまいました。感染者が出ると、その人の使っていたものなど家の中のものを焼き捨てられてしまいます。何日間かは家族も外出を止められてしまうので、食料も買いにいかれません。感染した少女が治って家に戻ったら、他の家族全員が亡くなっていて一人になってしまったことがありました。
信頼する医者が亡くなってしまい、事の重大さを知った人々は感染防止に努め、御聖体も手でいただくようになったり、挨拶もハグではなく、日本式にお辞儀になりました。
その後、町のあちこちには消毒液の入ったバケツがたくさん置かれるようになりました。この感染症が、容易に終息することなく、特にアフリカ大陸のもっとも貧しい人々の間に広がっていることを、ローマ教皇も憂慮なさって心をひとつにして祈るように呼びかけておられます。マラリア、気候、食べ物、言葉の違い

からくる小さな苦労はありますが、こうして神様と人々の奉仕のために、神様の道具として使っていただける喜びはそれらをはるかに凌駕しています。
　この仕事をとおして、誰かに幸せになって欲しい。そういう心をもってなされた仕事は、たとえ目立たない仕事であっても、神様に祝福されたものとなるのではないでしょうか。

　私はシェラレオネでシェラレオネの人々とともに生きることができてとても幸せです。これも多くの方々のお祈りと援助のおかげです。
　これからもどうぞよろしくお願い申し上げます。ありがとうございました。

　後記：40 年もこのような状況下シェラレオネで生活されているシスターの笑顔に神様の働きを感じました。
　「愛の対語は憎しみではなく無関心」です。私たちのできることは限られていますが、目に見えないところで日々起きていることに常に目を向け、祈りと共にできる限りの援助をしていきたいと思います。

シェラレオネの現状を聞く会　記

シェラレオネの住宅街

　アフリカ　シェラレオネでのエボラ熱とその家族のために、二回に渡って募金をいたしました。111,464 円集まりましたので、総額を御聖体の宣教クララ会 Sr 白幡和子にお渡しいたしました。教会の皆様方の、絶大なご協力誠にありがとうございました。

マリアンクラブからのお礼と報告

皆様方には、いつもマリアンクラブの活動にご支援をいただき、誠に有難く厚くお礼申し上げます。お陰様にて、平成 26 年度分として総額 91 万円を寄付させていただきました。

前年は東日本大震災を重くいたしました。本年 26 年度は社会の歪みの中、水も電気も食事もままならない極めて困難な所で、孤児院・障害者施設にて孤軍奮闘なさっている宣教者・修道者の方々に重点をおいて支援させていただきました。

以下感謝を込め、寄付先をご報告いたしますので、よろしくご承知いただきますようお願い申し上げます。

なお、当クラブの売上には、日曜玄関ホールでのお買い上げが大きく寄与していることを申し添え、今後とも一層のご協力ご支援をおねがいする次第です。

＜平成 26 年度の寄付先＞

✻ユニセフ
✻パキスタン・カラチ身体知的障害児センター
✻マダガスカル、コンゴ、セネガルの貧しく医療費が払えない乳児園・クリニック
✻シェラレオーネ、ルンサ　エボラ熱の為食糧支援、学校復活支援
✻フィリピンネグロス里親支援
✻フィリピン聾唖施設を支援する会
✻日本カトリック海外宣教を支援する会
✻東日本大震災　仙台教区

マリアンクラブ代表　湯澤民夫
東京都世田谷区三軒茶屋 2-51-32
カトリック三軒茶屋教会内
TEL&FAX　03-3412-8268
日・火・木　10 時～15 時

(マリアンクラブからのお知らせ)

✻商品の内容が一部新しくなりました。
✻活動日　日・火・木　10 時～15 時
✻留守の場合はメッセージ、ファックスにてよろしくお願いいたします。
✻遠方よりお出でになる場合は、TEL・FAX でご一報下さいませ。
(他の行事が入り、一時的に留守をすることがありますので)

人のうごき

転　　出

2015 年 2 月 22 日

ジャンヌダーク　桑島　綾乃　　②ブロック京都教区西陣教会へ

2015 年 3 月 4 日

ラウラ・ビクーニア　濱口　佳織　　②ブロック 長崎教区俵町教会へ

こ よ み

４月　５日(日)　復活の主日　10 時 30 分復活ミサ後ホールにて茶話会
４月１２日(日)　復活節第 2 主日（神のいつくしみの主日）
４月１３日(月)　聖マルチノ 1 世教皇殉教者
４月１６日(木)　聖ベルナデッタ
４月１８日(土)　聖アポロニオ殉教者
４月１９日(日)　復活節第三主日
４月２１日(火)　聖アンセルモ司教教会博士
４月２３日(木)　聖ジェルジオ殉教者・聖シルヴェリオ教皇殉教者
４月２４日(金)　聖フィデリス（ジグマリンゲン）司祭殉教者
４月２５日(土)　聖マルコ福音記者
４月２６日(日)　復活節第四主日・世界召命祈願の日
４月２８日(火)　聖ペトロ（シャネル）司祭殉教者
４月２９日(水)　玉川通り宣教協力体合同バスハイク・昭和の日

５ 月

５月　１日(金)　労働者聖ヨゼフ
５月　２日(土)　聖アタナシオ司教教会博士
５月　３日(日)　復活節第五主日
５月　４日(月)　聖十字架発見の記念
５月　５日(火)　アルルの聖ヒラリオ司教
５月１０日(日)　復活節第六主日・世界広報の日
５月１２日(火)　聖ネレオ　聖アキレオ殉教者・聖パンクラチオ殉教者
５月１４日(木)　聖マチア使徒
５月１７日(日)　主の昇天
５月１８日(月)　聖ヨハネ 1 世教皇殉教者
５月２１日(木)　聖クリストバル・マガヤネス司祭と同志殉教者
５月２４日(日)　聖霊降臨の主日

あとがき

◇ 穏やかな春の陽気に包まれ、満開の桜とともに、主のご復活の祝日を迎えております。教会員の皆様、おめでとうございます。

◇ 今号の「おとずれ」には、湯澤神父様は「家庭集会」と題しての巻頭言を掲載しています。ブロックの見直しは大変であるが、教会員の高齢化を考えると、今必要な課題です。

◇ 聖アントニオ修道院の静一志神父の、四旬節黙想会では「回心とは？」をテーマにお話しいただき、回心とは「私達の心を 180 度」回して神様中心に切り替える事等お話をされました。

◇ 御聖体の宣教クララ修道会の Sr 白幡和子には、シェラレオーネで子供の教育に携わっていて厳しい現状を訴えられました。私たちが一杯のコーヒーを我慢できたら、現地の子どもたちの一か月食費が賄えられる等話されました。詳しくは、掲載記事をご覧ください。

◇ 次号「聖霊降臨号」(第 60 巻 第 4 号)は、2015 年 5 月 24 日発行です。

『おとずれ』第 60 巻 第 3 号 2015（平成 27）4 月 5 日発行
発　　行　カトリック三軒茶屋教会
編集・印刷　カトリック三軒茶屋教会･広報委員会
主任司祭：ミカエル 湯 澤 民 夫
〒154-0024 世田谷区三軒茶屋 2－51－32
TEL 3421-1605　FAX 3421-9788
http://home.f05.itscom.net/sancha/index.htm
sancha-catholic0629@leaf.ocn.ne.jp

中庭で行列前・枝の主日の祈り.

枝の主日の聖堂